ARCADIA

52
SPRING 2012

Okazaki City Museum News

岡崎市美術博物館ニュース
［アルカディア］

OKAZAKI MINDSCAPE MUSEUM
岡崎市美術博物館

眼の極楽 三　人の姿かたちを描く

館長　榊原悟

（承前）常足道人佚山の画像を紹介した。そこに描かれた佚山の姿は、古稀を迎えた男が初春に心機一転、襟を正したかたちであったはずだ。とは云え身にまとう衣は墨染めに粗末な袈裟。出家の身に通用のそれではあるが、古稀と正月、二つながら迎えた賀の人の姿にしてはいかにも質素で、とりたてて晴れやかに威儀を正しているわけではない。

もしこれが禅僧の肖像画いわゆる頂相であったならば、ここは像主を曲禄（椅子）に座らせ、その背もたれに錦襴などの豪華な法被を掛けた像容にするのが普通だろう。それが正装で、画像はそうあるべきだからだ。

だが図の佚山は、文机を前に端然として座すのみであった。背筋をぴんと伸ばして居ずまいを正した姿に、賀の人のかたちを見ることができるのかも知れないが（その佚山の姿を助長するように引かれた若僧の背の強い垂直線に注目したい）、それにしても拱手した腕を机に置いた、くつろいだ姿は異例だ。しかも頭を上げ、上方の賛を見つめる。概してそれ以前の肖像画が何を見ているのか不明なものが多いのに対し、ここでの目の動きはまことに印象的だ。その視線に導かれるように、この画像を見るわたしたちの目もごく自然に賛に向かう—と前回述べたが、像主が顔を上げているのは、どうもそうした図様構成上の要請からのみではないようだ。わたしは、むしろこれは佚山の癖ではないか、と思う。おそらく思案する折など佚山は日常的にこうしたしぐさをとったのだろう。画面を支配する親密で日常的雰囲気は、そう思わせるに足る。むろん場所は書斎だ。筆を拠げ入れた筆筒に硯、書物、それに師を見上げるうしろ向きの若僧、これらは像主佚山の日常性の表現以外の何ものでもあるまい。その日常にどっぷり浸かって、なお日常に流されぬ—実践すべき「三十六不」の覚悟は、そのためであったのだろう。古稀を迎えて「不捨所業筆墨」（自賛）と喝破した、その言や、よしとしておこう。俗に在りて俗に染まらぬ、畸人佚山の面目躍如たる画像と云うべきか。それが自画像であったところが興味をひく。

その意味で見逃し難いのは『三上孝軒・池大雅対話図』（東京芸術大学資料館蔵）である（図1）。大雅（一七二七～八四）と云えば、妻の玉瀾（一七二七～八四）と琴瑟相和し、二人ながらまさしく畸人伝中の人（『近世畸人伝』に妻の筝に合わせて大雅が三絃を弾き歌うところが三熊花顛によって描かれている）。その大雅が、親しい京都の儒者孝軒（～一七九八）の不惑（四十歳）を祝って描いたもの。図上部の大雅自賛に「双来四十亦須叟」と、大雅本人も間もなく四十歳になるとあるので、その前年三十九歳の時の筆とみれば、宝暦十一年（一七六一）の作となる。画面右奥が孝軒、その孝軒に相対して下座に座るのが大雅。横顔ながら「少し太り、肉腫れたるやうの顔にて」（『以文會筆記』）と伝えられる小太りで丸顔の大雅、今しも左手に持った巻物を手渡そうとする。孝軒もそれを受取ろうと右手を差し出す。両者をつなぐ巻物すなわちこの画というのである。

つまり本図は、大雅が文漪安先生こと孝軒の四十の賀を祝って巻物を奉呈している、その一瞬を捉えたように見えながら、現実そのものを写したのではない、ということだ。いや、実際に手渡した時もこんな風だったのだろう。だが、そのことはどうでもいい。

重要なのは、そうした奉呈の場面を、大雅が思い浮かべながら描いたということである。むろん図様はすべて大雅の頭の中＝構想に基づく。興味深いのは、それが二人の人物を対向させたかたちであったという点だ。図を『対話図』と奇妙な名で呼ぶのも、そうであればこそだろう。当然、下座の大雅はうしろ向きとなる。『常足道人画像』における若僧と同じだ。しかし、その若僧が、像主とほぼ相似形をとる程度であったのに対し、『対話図』で大雅は、二人の人物の像容にさらに趣向を凝らした。

膝を交えて向かい合う二人、大雅が左手で差し出した巻物を受け取ろうと、孝軒は右手を差し出す。大雅の右手は右腿に、孝軒の左手は左腿に軽く置かれている。二人がまとう羽織の袖や袂、襟、背筋のかたちや輪郭線、墨色の濃淡それぞれが見事な対応を見せる。訥々とした描線が何とも美しい。孝軒の羽織は黒、内着は白、大雅はその真逆である—と二人を描くかたちを較べてみれば、そう、慧眼なる読者は、もうお分かりだろう。二人は寸分の狂いのない鏡像関係にあった。一方が、もう一方を鏡に映したようなかたちに描かれているのである。

図上の大雅自賛に云う。

ESSAY

雪鬢霜髯共相咲（大雅自賛）

あなたもわたしも「共」に鬢や髯に雪や霜のような白いものが混じるようになったではないか。もう四十だ、とお互いの顔を見て咲い合う。そこには信頼を寄せ合う二人の肝胆相照らす、深い交わりがあったのだろう。大雅が『対話図』で描きたかったのは、その交わりの深さであったのだ。そのために二人を鏡像関係に置くことが如何に効果的か、もはや云うまでもあるまい。

とは云え『対話図』は、不惑を迎えた孝軒に祝意を表すための肖像画（大雅にとっては自画像でもあった）であったはずだ。本来ならば像主のあるべき姿、不変のかたちを描かねばならない。もちろん威儀を正したかたちこそが相応しい。だが、大雅はそうしなかった。その替わり贈り物の贈呈という現実の中に落とし込んで描いてみせた。それも贈る自分と、当の贈り物自体までも描き添えて。

もう一点。興味深い肖像画を見ておこう（図2）。いかにも文人らしい文人（だから畸人だろう）岡田米山人（一七四四～一八二〇）の自画像だ。大胆なデフォルメがいつも愉しい。わたしの好きな絵師の一人だ。

図もそうした期待に応えてくれる。居ずまいを正して―いや、とんでもない。片肌脱いで、こちらに背を向けた米山人が胡坐をかく。右手には一合どころか、酒がたっぷり入る酒杯をのせる。気持ちよさそうに両目を閉じる。すでに相当聞こし召した後なのだろう。図上の自賛によれば、「得全於酒」という、上戸にはこたえられない一文を刻した印章を入手した記念に描いたという。

酒国有長春

酒のもたらす長寿を謳っている。人によってその量は異なるが、適度の酒は、春の心地よさをくれるとでも云うのだろう。肩ごしに見える机には蘭が咲き匂う。伸びた葉が、すっきりと立ち上がる細く長い画面に、気持ちいい。筆架に架けた筆、硯、墨それに書物。「壺中ノ天」ならぬ「斎中ノ天」とでも云うべきか。畸人米山人の日常に自足する自画像である。

肖像画三点を瞥見した。選択はあくまでわたしの好みによる。結果的にそれら三点は、かくあるべき＝像主を型どおり描いたものより、像主の人となりを髣髴とさせるものが選ばれることとなった。いずれも趣向を凝らした畸人たちの画像、制作も十八世紀半ば以降のものとなった。畸人がもてはやされたのもちょうどこの頃である。となれば三点の画像は、そうした時代が生み出したとも云えるだろうか。少なくともこれによってわが国の肖像画の歴史に、豊かな彩りが与えられたことは疑いない。

興味深いのは、それらがいずれも「自画像」であった、という点だ。描かれているのが畸人だったから興味深いのではない。像主自ら描いた「自画像」であったから面白いのである。というのも「自画像」には、描いた本人が自分自身をどう認識していたのか、そしてどう見せようとしていたのか、そうした思いが込められているからである。三点の画像にもそうしたメッセージが込められていた。さまざまに凝らした趣向もそのためであったはずだ。その趣向を読み解く。「自画像」を見る愉しさも、そこにある。

そこで次回は、思いもかけない趣向の「自画像」（？）を一点紹介し、読者を驚かせようと思う。

図1「三上孝軒・池大雅対話図」池大雅筆・賛

図2「岡田米山人自画像」自筆自賛

ESSAY

マンチェスター大学ウィットワース美術館所蔵

巨匠たちの英国水彩画展

―ターナーからブレイク、ミレイまで―

村松和明

J.M.W.ターナー《アップナー城、ケント》1831–32年

EXHIBITION

英国水彩画の世界屈指のコレクションを持つことで知られるマンチェスター大学ウィットワース美術館は一八九〇年に開館した。美術館に冠されたウィットワースという名は、ヴィクトリア朝時代を代表する機械技師のひとり、ジョゼフ・ウィットワースに由来する。彼は遺言に、当時としては驚異的な五十万ポンドを教育目的に使用するように書き記したが、それ以上の指示は残さなかった。生前に彼は、美術品の収集にはほとんど関心を示さなかったというから、いかにしてウィットワースの名を冠する美術館が生まれたのかを少し説明する必要があるだろう。

この美術館の母体となったウィットワース学院は、工科学院に商業博物館を併設するというものであった。収集はこの地の主要産業となっていた木綿、織物であったが、芸術品を展示して欲しいという市民の要望にも応えて、美術品の寄付も受け入れることになった。

一八七七年にヴィクトリア女王即位五十周年博覧会がマンチェスターで催され、時代を代表する美術家の作品が展示されると、そこに出品されていた水彩画にはとくに関心が集まった。館でその多くを購入することになり、「英国水彩画の代表作展」の常設展示が設置されることとなった。それを受けて一八九二年には、篤志家からターナーの重要なコレクションが寄贈され、十八世紀半ばから十九世紀半ばまで、百年間の水彩画の展開を示すことが可能となった。

英国水彩画の「黄金時代」は一七五〇年頃に始まり、ターナーの没する一八五一年頃に終息するとよくいわれるが、まさにこのコレクションの核となる部分はその黄金期と重なっている。その後の度重なる寄贈によって十九世紀後半のラファエル前派とヴィクトリア朝後期の画家たちの優品までが収蔵されることになり、「黄金時代」と呼ばれる後においても、きわめて優れた水彩作品が制作されていたことを実証するコレクションとなった。

このようにして、水彩画のコレクションを増大させていったウィットワース美術館の収蔵品は、現在では三千点を超えるといわれている。その長い収集活動から集まった優れた水彩画の中から、本展ではターナーやウィリアム・ブレイク、ラファエル前派のロセッティやエヴァレット・ミレイ、バーン＝ジョーンズまで、日本でも人気の高い英国美術を代表する画家の名品約百六十点を選んで展示している。

水彩画は油彩画のスケッチ及び習作として描かれることが多かったのだが、本展では、水彩画を芸術のひとつの表現として描く画家たちがイギリスにおいて登場する過程を見ることができる。そして水彩画の奥深さと幅の広さを堪能できると共に、十八世紀、十九世紀の様式や技法の流れも感じることができることだろう。

水彩画は、光の影響を受けやすい脆弱な美術品であることから公開される機会も少なく、今まで英国の水彩画を日本においてまとめて展覧するような機会はほとんど得られなかった。今回は、ウィットワース美術館の特別なご協力によってこれだけの名作を一堂に岡崎で展観することが許された。そのおかげで本展は日本初公開の作品が過半数を占め、過去最大規模の英国水彩画の決定版と言える展覧会となった。

ウィットワース美術館の皆様のご配慮とご協力に感謝するとともに、せっかくいただいたこの稀有なる機会に、より多くの皆様に、水彩画の真の魅力に触れていただければと思う。

会期：平成24年4月7日（土）～6月24日（日）

皆さんは「本多忠勝」を御存知ですか?本多忠勝(一五四八～一六一〇)は、岡崎に生まれ、徳川四天王の一人として酒井忠次・榊原康政・井伊直政とともに徳川家康の天下統一に大きく貢献した生粋の三河武士です。武勇の誉れが高く、「生涯において五七度の合戦に出陣しながら傷一つ負わなかった」とか、「家康に過ぎたるものが二つあり、唐の頭に本多平八(忠勝)」と敵の武田方の小杉左近より讃えられたなどの逸話が伝わっています。しかし忠勝の名は知られていても、その子孫が江戸時代後期から明治維新まで約百年にわたり城主としてこの地を治め、岡崎と非常に縁の深い大名家であったことは、意外に知られていないのではないでしょうか。

今回の展覧会は、忠勝以降十六代にわたり譜代大名として江戸幕府を支えた本多家の約二六〇年の歴史をたどるものです。本多家は戦国から江戸時代にかけて大名として取り立てられ、上総大多喜、伊勢桑名、播磨姫路、大和郡山、陸奥福島、播磨姫路、越後村上、三河刈谷、下総古河、石見浜田、三河岡崎と転封を重ねており、これらの地には本多家の足跡を示す資料が残されています。本展では本多忠勝所用の黒糸威胴丸具足(重要文化財)をはじめ歴代当主の甲冑などの名宝やゆかりの品々を紹介するとともに、譜代大名本多家の全貌を明らかにします。

さらに今年七月六日より、この本多家の分家筋にあたる本多忠次氏の邸宅が、東京都世田谷区から岡崎市東公園内に移築され、復元公開されます。本展を御鑑賞頂くとともに、この機会に昭和初期を代表する近代建築である旧本多忠次邸にも、是非足をお運び下さい。(浦野)

EXHIBITION

旧本多邸は、昭和七年(一九三二)、世田谷に建設された洋風住宅で、忠次氏が、一九九九年、一〇三歳で亡くなるまで生活を送った場所です。大きな改築・改装を行うことなく、家具やカーテンなどもぼろぼろになるまで使い続けており、自分が建てた家、自分が選んだ家具調度類に深い愛着を持って生活をしていたことが分かります。この度の本多邸の移築・復元にあわせて、忠次氏の蔵書やメモ帳なども岡崎市に寄贈されましたが、メモ帳には、土地探しにはじまり、建築家の選定や部屋の配置、洋服箪笥の寸法からお風呂に取り付ける呼び鈴に至るまで、事細かに考えがつづられており、忠次氏の溢れんばかりの思いに驚かされます。そのうえ感心なのは、メモに引用された参考資料や蔵書類が、洪洋社発行のプレート型写真図版集『建築写真類聚』や、木檜恕一著『新しい家と家具装飾』、森谷延雄著『これからの室内装飾』等々であるということです。大正後半から昭和初期にかけて、日本では近代化が進展し、「新しい生活様式」と、そのための「新しい住居」のあり方が大いに議論されたのですが、これらの書籍は、そうした住宅・生活思想をまとめた最も代表的なもので、しかも読者として想定されていたのは、新たに登場したホワイトカラー、中流階級の人たちでした。ここからは、忠次氏が、ただ体面的に上流階級好みの洋館を建てるのではなく、進取の精神に学ぼうとしていたことが窺われるでしょう。

展覧会では、写真や図面とともに忠次氏の蔵書をお見せし、当時の住宅思想をご紹介します。本展を見て、本多邸を訪れれば、より本多邸の面白さを感じとっていただけるはずです。(千葉)

岡崎市旧本多忠次邸復元記念

徳川四天王 本多忠勝と子孫たち

－岡崎藩主への軌跡－

浦野加穂子／千葉真智子

会期：平成24年7月7日(土)～8月19日(日)

「本多邸浴室」

集荷の旅（7）

荒井信貴

年に数回は訪れるお気に入りの美術館があります。滋賀県にあるＭＩＨＯミュージアムです。名神高速を栗東インターで降り、奈良時代、東大寺僧良弁が創建したと伝えられる金勝寺の山を越え、さらに奥深くへと入った山中にある館です。今では新名神開通で、信楽インターから狸の置物の並ぶ道筋を進み、はずれてしばらくすると到着です。受付棟からの移動は電気自動車。しだれ桜の並木に、椿・躑躅・楓が植えられ、季節ごとに目を楽しませてくれます。やがてトンネルを抜けると東洋的な屋根の重なりの正面が見え、丸窓をもった扉が迎えてくれます。そう、この館は桃源郷をイメージして造られているのです。昨年春の当館企画展「桃源万歳」も、本当はこのＭＩＨＯとの２館で行いたかったのですが、展示品に東洋画・日本画が多くその展示制約から打診を断念したものでした。ギリシア・エジプトから仏教美術、日本近世美術に至る膨大なコレクションを持ち、館長は若冲など奇想の画家たちを見出した辻惟雄氏です。そのコレクション収集段階では、衛藤駿当館２代目館長も関わっていました。

この館には古代バクトリア関連の資料借用にも伺っています。駐車場へ向かう一般通路から離れた別ルートで館建物へ。あまり広くない通路からいきなり搬入ヤードへと美術品専用車を頭から突っ込みます。他の館では必ずバックオーライでプラットフォームにお尻をつけるのですが、ここでは反対側。どうしようかと思っていたとたん車が回転し始めて驚きました。ターンテーブルが設置され車が１８０度回転したのでした。点検に立ち会う学芸員も研修はニューヨークとのこと。立地環境、施設、コレクション、どれをとっても宗教法人営らしい壮大なスケールを誇っている美術館です。

COLUMN & TOPIC

研修会

浦野加穂子

愛知県内二二館が加盟する愛知県博物館協会では、館員のための部門別研修会を行っています。今回は調査・研究部門研修会「収蔵資料のデータベース化について」の内容を紹介します。

今回の研修では、収蔵品管理システムを専門に開発している早稲田システム開発株式会社、および収蔵資料のデータベース化を進めているトヨタ博物館と安城市歴史博物館の事例報告がありました。収蔵品の管理方法は、従来の紙台帳などから、収蔵品の二元管理を目指してデータベース化を進める館が増えています。しかし各館ごとに歴史、美術、自然史など資料の内容に特色があるため、確固とした台帳のフォーマットがなく、独自のシステム開発には多くの課題があります。

早稲田システムが開発したシステムは、豊富な事例をベースに作成した基本フォーマットに、入力項目を追加・変更し、情報タブの位置などをアレンジして、台帳様式を各館でカスタマイズすることができます。入力情報は貸出・展示履歴などにも連動しており、さらにデータセンターでソフト・ハードウェアを集中管理し、ネット経由で利用するクラウド型であるため、多額の初期投資をかけずに月々の利用料のみで導入が可能であり、画像や文字情報の量にも制約がなく、機能やデザインなども常に最新版が利用可能であるなどのメリットがあります。しかしネットを介するため、高いセキュリティやバックアップの必要性などに懸念が残ります。

事例報告では、システム導入の前に、まず館員の共通理解のもとで、資料の現状を把握し、資料情報や分類などを整えることが重要であること、その上で情報の共有化と一元管理、大容量の画像や調査情報の蓄積、検索時間の短縮、受入・貸出作業のシステム化、さらに後世への資料情報の保存・伝達のためのデータベース化等の目標や方針を明確にする必要があるとの提言がありました。

収蔵品の管理は博物館の根幹です。今回の研修を踏まえて、当館でもよりよい収蔵品管理を行えるよう努めていきたいと思います。

書籍紹介

伊藤久美子

藤木久志『中世民衆の世界 ―村の生活と掟』

最近読んだ本(と言っても昨年の秋になるが)ということで、岩波新書から紹介。

本書は、「飢餓奴隷の公認」という鎌倉幕府法にある超法規の法で衝撃的に始まる。第一章 村掟―暴力の克服、第二章 惣堂―自立する村、第三章 地頭―村の生活誌、第四章 山野―村の戦争、第五章 直訴―平和への道という構成である。著者が「本書の主題は、「地頭は当分の儀」といわれるような領主に対して、「末代の者」といわれた、土着の百姓たちの行動と、彼らが拠点とした村の成長の内実を解き明かすことである。」と述べているように、史料を読み解きながら、中世から近世の村落の断面とその変化を切り取りつつ、各章で一貫して、当時の百姓たちの位置づけを探っている。

紹介されている史料からは、当時の村が想像以上に暴力的だったことが浮かびあがってくる。山野をめぐっては村同士が争い、合戦のような形にまで発展することもあったし、村の掟によってそれを破った者を殺したり、追放したりした。しかし、たとえ追放した者であってもその「家」を村全体で守ろうとし、もし、そうした者に子どもや親戚がいたら、できるだけ継がせようとした事例や、村同士の争いのなかで犠牲になった者に対しても、その家族の行く末を村が保障するようなこともあった点はとても興味深い。

中世において百姓とか村といえば、領主の支配下に置かれ、何かと制限された窮屈な生活、ともすれば戦をする領主の犠牲となるイメージが一般的ではなかろうか。だが、本書では、このイメージは払拭される。がっちりとした構成の難解な学術書でない分、興味を持たせる小見出しと適度な文書の区切りで、日本中世の民衆像について、おおよそ時代の流れに沿っていねいにまとめられており、テンポよく読み進めることができる。史料を単に提示するだけでなく、噛み砕くように読み解いてくれれば、とっつきにくい史料が身近に感じられる。自戒の念とともに、そんなことを思いつつ読み進めた一冊である。

(新書判、二四五ページ、八四〇円、岩波書店、二〇一〇年)

COLUMN & TOPIC

お知らせ

美術系3施設共通年間パスポート 4月から販売

美術博物館・地域文化広場(おかざき世界子ども美術博物館)・美術館の美術系3施設を、多くの方が・安価に・何度でも利用していただくとともに、優れた芸術・歴史資料等の鑑賞と学習機会の場として活用していただくため、共通年間パスポートを販売(発行)します。

○発売(発行)開始日は?

平成24年4月1日・日曜日からですが、各施設とも休館日は除きます。

○販売(発行)場所は?

美術博物館・地域文化広場(おかざき世界子ども美術博物館)・美術館の展覧会入場券販売カウンターで、各施設備え付けの「3施設共通 年間パスポート購入(発行)申請書」に、必要事項をご記入していただき申請してください。

○販売金額は?

一枚 3,000円です。

市内の美術系3施設では、1年間に10本程度の展覧会が開催されますが、その内の、美術博物館で開催する企画展3本分の入場料合計額相当です。

○年間パスポートの有効期間は?

販売(発行)された日の翌年の月末までです。

○年間パスポートでお得なことは?

年間パスポートをご提示いただくことで、次のサービスが受けられます。

①美術系3施設で開催する展覧会が何度でも観覧することができます。

②美術博物館ミュージアムショップの販売商品が5%割引となります(一部商品は除く)。

③美術博物館レストランセレーノでの飲食代が10%割引となります。

その他、岡崎市内の観光施設

①「岡崎城」・「三河武士のやかた家康館」の入館料が割引されます。

②「大樹寺宝物(文化財)拝観料」が割引されます。

③「真福寺菩提樹館入館料」が割引されます。

④「滝山寺宝物館拝観料」が割引されます。

詳しくは、各施設へおたずねください。

○美術博物館
電話 0564-28-5000

○地域文化広場
(おかざき世界子ども美術博物館)
電話 0564-53-3511

○美術館
電話 0564-51-4280

INFORMATION

巨匠たちの英国水彩画展

2012年4月7日(土)～6月24日(日)

■演奏会

5月6日(日)「美しき四重奏の調べ」

演奏　ヴィオレット・カルテット

■講演会

6月17日(日)「英国水彩画の魅力 ターナーからピーターラビットまで」

村松和明(当館学芸員)

＊いずれも午後2時から

■学芸員による展示説明会

4月22日(日)、5月13日(日)、6月3日(日)

＊いずれも午後2時から

やさしいミュージアム講座の受講者募集

市民の方々に歴史や美術をより身近に感じていただけるよう、平成24年6月～10月の毎月1度、連続講座「やさしいミュージアム講座(岡崎藩主本多家を知ろう!)、(突き抜ける芸術)」の2講座を開催します。

講座名／岡崎藩主本多家を知ろう!

■日時／平成24年6月～10月の毎月第2水曜日　10:30～12:00

■内容／岡崎藩主本多家に関わる武具、絵画、古文書などの魅力を紹介します。

■講師／杉浦良幸(刀剣研究家)、　榊原悟(当館館長)、荒井信貴・堀江登志実・浦野加穂子(当館学芸員)

講座名／突き抜ける芸術

■日時／平成24年6月～10月の毎月第3金曜日　14:00～15:30

■内容／美術史のなかでは、既成の枠組みに捕らわれずに革新的な表現をする作家が現れることによって、新たな芸術様式が生まれてきました。今回は近代から現代にいたるまでの「突き抜ける芸術」をご紹介します。

■講師／大島徹也(愛知県美術館学芸員)、高橋綾子(名古屋芸術大学准教授)、村松和明・千葉真智子(当館学芸員)

≪共通≫

□定員／50名(応募多数の場合は抽選)　□会場／当館1階セミナールーム

□参加費／無料　□申込方法／往復ハガキに、希望講座名(ハガキ1枚につき1講座の申込)・郵便番号・住所・氏名(ふりがな)・年齢・性別・電話番号を明記の上、5月15日(火)までに下記へお申し込みください。※各講座5回全て参加できる方のみご応募ください。※ハガキ1枚につき1人の申込に限ります。

□申込先／〒444-0002　岡崎市高隆寺町字峠1番地　岡崎中央総合公園内
岡崎市美術博物館「やさしいミュージアム講座」係

おしゃべり、あれこれ。

時と記憶の不思議さ

街中を会場にした展示を今秋予定していて、リサーチのために、最近何度か康生界隈を歩いた。松坂屋がなくなり、商店も減り、賑わいは失われたが、不思議と寂しくはならない。ふと立ち現れる昭和の匂い漂よう風景に幼い頃の記憶が蘇り、何とも言えぬ高揚感さえあった。

十年、二十年の単位で歳月を振り返ると驚くほど社会は変化しているのに、毎日の積み重ねの中にいると、新しい習慣や思考は知らぬ間に自分の中に沁みこんできて、それが当然のようになっていたりする。それでも過去は、ふとした瞬間に歳月を飛び越えて蘇り、かつての出来事や気持ちは、具体的に、またときにぼんやりとした感覚の総体として呼び覚まされるのだろう。

最近、漫談を聞く機会があった。漫談師は八十歳になる近藤志げるで、野口雨情や西條八十の唄を次々と歌った。「シャボン玉」くらいは分かったものの、私には馴染みのない唄ばかり。そう思っていたら、会場の多くを占める年配の人たちが、もう何年も口にしていないであろうその唄の数々をすらすらと歌い出し、一気に若かりし頃へと時間を遡っていた。

そこで最後に二つ映画を。『クレヨンしんちゃん 嵐を呼ぶ モーレツ！オトナ帝国の逆襲』は、大人になってしまった人たちの、昔日への繊細な思いと今を描いた良作です。(千)

百八十度の転換

早いもので、再任用職員として岡崎市美術博物館に採用されてから、1年が経過しようとしています。

私が岡崎市役所に勤務した41年間の中で、長く経験した職場は水道局の浄水場、環境部のクリーンセンターでした。浄水場での業務内容は、川から取り込んだ水を処理し、浄水として配水池に送り出す。標高の高いところには加圧施設で配水する。クリーンセンターでは、市民の方から輩出される廃棄物の処理。もちろん市民の方との接触もない、施設の維持管理、主要機器の保守管理、機器の更新などが主な業務でした。

岡崎市美術博物館職員となって何が変わったか？　今まで経験のない市民の方への直接サービスです。作品に当てている照明に異常はないか？　館内の温度、湿度は良いか？

展示スペースは綺麗になっているか？等で、来館された市民の皆さんに対して気持ちよく鑑賞される場を作ること。

初めは出来るか心配だった直接サービスですが、班員の皆の指導を受け、徐々に慣れ今ではすっかり慣れたと言いたいのですが、時々頼もしい後輩に注意、指導を受けています。注意を受けなくなるようになれば、美術博物館の本当の職員となれたと思えるでしょう。これからも努力して、本当の職員になれるよう頑張って行きたいと思います。(堅)

編集後記　新しい年度がスタートしました。職員にも多少の入れ替わりがあり、寂しさを感じながらも、気持ちを新たにこの1年に臨みたいと思います。新メンバーには、次号から、このページの「おしゃべりあれこれ」に参加してもらう予定です。さて、本年度最初を飾る「英国水彩画展」は、当館にしては珍しく3カ月にわたるロングラン展示です。年間パスポートを購入していただければ、何度でもお楽しみいただけますので、是非、ご利用ください。(千)

表紙図版：ウィリアム・ブレイク《日の老いたる者》1827年頃

OKAZAKI MINDSCAPE MUSEUM

開館時間　午前10時～午後5時
※最終の入場は閉館時間の30分前まで
休館日　月曜日(祝日に該当する場合は、その翌日以後の休日でない日)
年末年始　※展示替えのため臨時休館する事があります。

［岡崎市美術博物館ニュース／アルカディア］第52号 2012年4月発行
編集・発行　岡崎市美術博物館(マインドスケープ・ミュージアム)
〒444-0002　愛知県岡崎市高隆寺町峠1 岡崎中央総合公園内
TEL.0564-28-5000(代表)

岡崎市美術博物館　http://www.city.okazaki.aichi.jp/museum/bihaku/top.html　ARCADIA